

2011/3/20

イザヤ 43:1-2

使徒 16:16-40

「揺るがない平安」

この一週間、不安と緊張で過ごされた方も多いと思います。連日、流れる被災状況、そして原発関連のニュースに触れ、日本は、そして世界はこれからどうなってしまうのか、そのような先の見えない不安と恐れに襲われた方もおられるのではないのでしょうか。様々な情報にさらされ、漠然とした不安や恐れの中にいる方は少なくないと思います。そのような不安や恐れの中にいるものに対して、今日、神は次のように語りかけてくださる。

「主を信じなさい」。主イエス・キリストを信じる。それは、驚くほど単純なことです。神が与えてくださる救いは、こちらが拍子抜けするほど単純で、しかも高く深く広いのです。「主を信じること」。そこに救いのすべてがあります。不安やおそれの只中にある時、わたしたちに必要なのは、自分を信じることでなければ、日々流れてくる情報に怯えるのではなく、主を信じること。そして、それは神が私たちを愛しておられ、豊かな恵みを注ぎ、主イエス・キリストによって救いの道を開かれたことを信じるということです。この方を抜きにしては、わたしたちがこの危機的状況を乗り越えたとしても、その先に揺るがない平安は来ないのです。

「主を信じなさい」。この言葉を告げたパウロは、この時、仲間のシラスと共に牢屋に閉じ込められていました。彼らは、フィリピの町を混乱させるものとして捕らえられ、鞭打たれ、牢に入れられたのです。しかし、実際のところ、パウロたちは捕らえられるようなことは何もしていませんでした。ただ女奴隷にとりついていた占いの霊を、主イエス・キリストの名によって追い出したのです。それは、この占いの霊にとりつかれた女奴隷が、パウロたちの後ろをしつこくついてまわり、次のように叫んだからです。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」。彼女は間違ったことを言っていない。逆に正しいことを言って、宣伝してくれているように思えます。しかし、この占い師が信じる神は、パウロが宣べ伝える主イエス・キリストの父なる神ではありませんでした。彼女が信じる異教の神々の一人として、パウロたちの伝える主なる神を宣伝したのです。それに、この女占い師が宣伝しているということになれば、パウロが語るうとする主イエスの救いも、占いと同じようなものと誤解されることもあるかもしれません。この女奴隷は、来る日も来る日もパウロたちの後ろをついて、このように叫んでいたので、パウロはたまりかねて、主イエス・キリストの名によって占いの霊を追いだしました。この女奴隷は、占いの霊から自由になって、さぞかし嬉しかったろうと思います。

ところが怒ったのは、その女奴隷を雇っていた主人たちです。有力な金づるを失ったのです。そこでパウロとシラスを捕らえ、役人に引渡し、町を混乱させていると言って、ありもしないことをでっち上げて二人を訴えました。群集たちも一緒になって訴えたので、役人は、正式な裁判も

なしに、二人を何度も鞭でうち、牢に放り込みました。それも、ただ牢に入れたのではなく、牢の一番奥に入れて、足には木の足かせをはめました。

そのような出来事にあつて、パウロとシラスは、牢の奥でふさぎこんでいたでしょうか。主イエスの名によって伝道している者が、なぜこんな目に合わなければならないのかと、恨み言を言って気をはらしていたでしょうか。そうではありません。25節に次のようにあります。「真夜中ごろ、パウロとシラスが讃美の歌を歌って神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」。厳しい状況であるはずなのに、不思議な落ち着きと静けさが、ここにはあります。月の光も届かない牢の奥の暗く湿った場所。そこで二人は主を讃美し、祈っていたのです。ムチで打たれた傷の痛みもまだ激しかったでしょう。これからどうなるのかという不安もあつたでしょう。しかし、彼らはそこで神を讃美し祈った。そして、それが苦難の中で本当の支えになったのです。この讃美と祈りは、同じ牢に入っている囚人たちにも聞こえていました。そして、彼らはそれに聞き入つたとあります。パウロとシラスの歌声が美しかったから、聞き入つたわけではありません。パウロとシラスの讃美と祈りが、希望のない場所にいる囚人たちを励ましたのです。パウロとシラスは、牢の奥に閉じ込められ、足には足かせをはめられ、自由を奪われていました。しかし、彼らの信仰による自由、主が共にいてくださる喜びまでは、奪うことができませんでした。皆さんの中にも、苦しい時、辛い時に、讃美歌をくちさむことによって、支えられ慰められた経験のある方があると思います。

パウロとシラスはどんな讃美をし、どんな祈りを祈つたのでしょうか。わたしは、ここで詩編23編の一節を思い出しました。「死の影の谷を行く時も わたしは災いを怖れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける」。死の影の谷。死が私たちに襲おうとも、それは決定的なことではない。恐れる必要はない。主がわたしと共に、皆さん一人ひとりと共にいてくださる。「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける」。羊飼いは、時に羊が迷わないように、あるいは谷底に落ちてしまわないように、鞭や杖で行く手を塞ぎ、注意をうながすことがあります。良い羊飼いである主イエスは、私たちを愛するがゆえに、時にわたしたちにとっては厳しいと思える試練をお与えになります。行く手を塞がれることがあります。わたしたちには、その時は試練として映るのですが、それがわたしたちを本当に力づけ、慰めます。パウロとシラスにとっても、いわれの無いことで訴えられ、鞭打たれ、牢に閉じ込められるのは、喜ばしいことでは決してなかったはずですが、しかし、このことさえ用いて主は伝道を押し進めてくださるといふ主への信頼があつたのです。

さて、このようにパウロとシラスが、真夜中に神を讃美し祈っているときに、突然、大きな地震が起こり、牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れました。目を覚ました看守は、戸が開いているのを見て、囚人たちが皆、逃げ出したと思い、自殺しようとしています。囚人の脱走は、看守の監督責任として厳しく罰せられました。そのような死を迎えるくらいなら、いっそ自殺してしまったほうがいい。そうとっさに思ったのです。それを見たパウロは大声で叫びました。「自害してはい

けない。わたしたちは皆ここにいる」。驚いたことに、パウロをはじめとする囚人たちは、一人も逃げ出していないで。皆、パウロとシラスの讃美と祈りに聞き入り、牢の中にあつて与えられる神による自由を知ったのでしよう。看守は、牢の外にいました。一見、囚人よりも自由です。しかし、本当の自由を知らなかった。いつも囚人たちが逃げ出さないかとビクビク怯え、平安に生きることを知らなかった。しかし、このパウロという人は、牢の中にあつて恐れていない。それどころか、神を讃美し祈りさえしている。そして、牢の戸が開いたときには、誰も逃げなかった。それは、看守にとって信じがたいことであり、パウロたちが信じる神に対する畏れを抱かせました。

看守は、明かりを持って牢の中に入り、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏します。そして、二人を外に連れ出して問うのです。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」。これまで自分は、何不自由なく生きていたと思っていた。仕事もあり、家族もあり、足りないものはないと思っていた。しかし、地震による危機によって、自分に足りないものを付きつけられたのです。それは、本当の救いです。闇の中にあつても、神の光に照らされて、讃美を歌い、祈ることのできる揺るがない平安です。それが自分にないことを知らされ、救われるためにはどうすべきなのかを真剣に問うたのです。その時のパウロの答えが、説教の冒頭でも触れました「主を信じなさい」というものでした。31節「主を信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」。救いとはこんな単純なものなのか。そうです。こんな単純なものなのです。主イエスが私たちの罪のために十字架に死に、三日目に復活なされ、今も生きて私たちと共におられる。それが、わたしたちをすべての恐れから解放する喜びの知らせです。

ここでは、主を信じることによって、「あなたも、あなたの家族も救われる」とあります。これは、家族に一人洗礼者が生まれれば、その家族全員が自動的に救いに入れられるということを行っているではありません。しかし、家族に一人の信仰者が生まれるならば、その家族が主の御言葉を耳にする機会は、そうでなかった時よりも増えていくでしょう。そして、それは主の救いに一歩近づいているということです。家族で、自分だけキリスト者であるという人は、この日本に少なくありません。家庭の中で、肩身の狭い思いをされている方もおられるでしょう。しかし、あなたがキリスト者であるということは、あなただけの救いに関わるのではなく、その家族全体、もっと言えば、職場や学校、また地域全体の救いに取って必要なことなのです。その家庭や地域に一人でもキリスト者いれば、その人を通して、何かのきっかけで聖書の御言葉や讃美歌に触れるチャンスがあるかもしれません。なかなか家族に信仰が伝わらなくて、やきもきされている方もいるかも知れません。しかし、働いてくださるのは神ですから、焦る必要はありません。安心して主に祈りつつ信仰の道を歩むとき、主は必ず道を開いてくださいます。そのことを信じ、諦めずに祈り続けることは大切なのです。

パウロは、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語ります。真夜中、地震に怯える人々に主イエス・キリストこそが、わたしたちの救い主であり、この方を信じることによる救いを語りました。まだ真夜中であつたにも関わらず、看守はパウロとシラスを連れて、鞭打ちによってできた打ち

傷を洗い、先程の無礼を詫びました。そして、この看守は家族のものと共に、洗礼を受けたのです。そして、さっきまで看守と囚人の関係であったものが、同じ食卓を囲み、神を信じる者となったことを互いに喜びました。

パウロたちにとって、牢に入れられたことは苦しみではあったでしょうが、この苦しみはただ苦しみで終わるのではなく、看守が洗礼を受けるという喜びを生み出しました。ここに神の深いご計画を覚えます。わたしたちは、救いと聞きますと、どこかで苦しみや悲しみがなくなり、自分の思い通りになるということを考えがちだと思います。だから、苦しいことや悲しいことがあると、神の救いはどこにあるのかと考えてしまう。しかし、主が与えてくださる救い、聖書が語る救いとは、そのような苦しみや悲しみがなくなるというものではありません。苦しみや悲しみの只中であつても、神が支えて下さり、守って下さり、導いてくださることを信じ、主にゆだねることを。それが、わたしたちの与えられている救いです。

牢の奥は闇でした。真っ暗闇の中に置かれたパウロとシラスには、讚美と祈りの言葉が与えられました。それは、闇に輝く光でした。それは自分のやる気や勇気によって湧き上がってきた光ではなく、神が与えてくださった光です。イザヤ書第43章には、戦争に負け、自分たちの国を滅ぼされ、苦難の只中にいるイスラエルの民に神が語られた言葉が次のように語られます。「ヤコブよ、あなたを創造された主は イスラエルよ、あなたを造られた主は 今 こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う、あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を通っても、焼かれず 炎はあなたに燃えつかない」。私たちの信じる神はこのような方であり、そして、愛する独り子主イエス・キリストさえ、惜しまずわたしたちの救いのために与えてくださった愛の神です。この主なる神を信じること。それが、わたしたちを救う唯一の道であり、そこにこそ揺るがない平安と確かな希望があるのです。